

報告

看護学士課程における「エビデンスをさがす」演習での学生の学び
Evaluation of “Searching the evidence” program
in baccalaureate nursing program

片平 伸子¹⁾、小山 真理子¹⁾、竹内 淳²⁾

1) 神奈川県立保健福祉大学 保健福祉学部 看護学科

2) 神奈川県立保健福祉大学 図書館

Nobuko Katahira¹⁾, Mariko Koyama¹⁾, Atsushi Takeuchi²⁾

1) School of Nursing, Faculty of Health and Social Work,
Kanagawa University of Human Services

2) Library, Kanagawa University of Human Services

抄 録

研究成果を看護実践に活用する能力を育てるために、本学看護学科では2年次前期に必修科目として「エビデンスベーストナーシング (EBN)」を開講している。この科目の「エビデンスをさがす」演習では、事例から問題を明確に文章化し、そこに含まれるキーワードを用いて文献検索を実施し、有用と思われる文献5件を選ぶ演習を小グループで実施している。本研究の目的は、この演習によるエビデンスを探す過程での学生の学びを明らかにすることである。課題レポートの分析から以下の内容が明らかになった。1) キーワードは1テーマあたり2～9個使用されていた。2) 選ばれた文献全64件中、原著が50件 (78%) を占め、学生はエビデンスの高さを意識していた。3) 文献選択の理由は「論文の内容」が全50回答中、27件 (54%) を占めたが、エビデンスの検討で重要な要素も検討されていた。4) プロセス全体の考察では「エビデンスをうまく探せた理由」として「明確にPICOを立てたこと」「シソーラスの活用」などがあがっており、問題の特定の重要さなど、エビデンスを探す上で重要な点が学生に理解されていることが示された。

キーワード：エビデンスベーストナーシング (EBN)、情報検索、看護学士課程

Key words : Evidence-based Nursing (EBN), Information Retrieval,
Baccalaureate Nursing Program

はじめに

看護基礎教育において、研究成果を活用して看護を実践する能力は重視されている。平成16年の看護学教育の在り方に関する検討会 (2002) の報告においても、「看護実践充実にかわる研究成果の収集と実践への応用」が看護学士課程の学生が卒業時に

到達すべき目標の1つとして挙げられている。

本学においては、看護学科の教育目標の1つとして、「科学的根拠に基づいた看護実践に向けて系統的に情報収集し、有用な情報を選択できる」ことがあげられており、2年次前期に必修科目として「エビデンスベーストナーシング (EBN)」(以下、EBN科目と略す) を開講している。この科目では、学生は講義と演習でEBNの基本を学んでいる。

本研究では、EBN科目の中で特徴的な「エビデンスをさがす」演習に焦点をあてて、エビデンスを探す過程での学生の学びを明らかにし、学士課程に

著者連絡先：神奈川県立保健福祉大学看護学科

〒238-8522 神奈川県横須賀市平成町1-10-1

(受付 2007.9.19 / 受理 2008.1.23)

におけるEBN科目の構成やカリキュラムの検討に向けての示唆を得ることを目的とする。

EBN科目および「エビデンスをさがす」演習の概要

1. EBN科目の概要

この科目に先立って、学生は1年次後期に「文献検索とクリティーク」の授業を通して、文献についての基礎知識とデータベースを使った文献検索の基礎技術を習得している。

EBN科目のねらいは、「看護実践の根拠を常に意識し、対象にとってその時代における最善の看護を提供するために、科学的根拠としての研究成果を系統的に検索し、エビデンスとしての研究成果を吟味し、看護実践に適用していくための基本的な考え方や方法論を理解する」ことである。また、本科目をEBNの入門として位置づけ、看護実践にとっての重要な考え方を理解することを目的としている。

授業は15回・30時間で行われ、最初にEBNの概念、EBNの基本的なステップやEBNを活用することの必要性、臨床の疑問と研究方法との関連、EBNに用いられる研究デザインとエビデンスレベル、看護過程とEBNの関係などについて講義で学ぶ。その後、グループワークで「エビデンスをさがす」演習（3回・6時間）と「エビデンスの質の評価」演習（5回・10時間）を行い、最後にまとめの講義を行うという流れになっている。

2. 「エビデンスをさがす」演習の概要

「エビデンスをさがす」演習は以下のようなEBNの基本的なステップ（小山，2001a）のうち、「ステップ1：問題を明確にする（問題の定式化）」「ステップ2：エビデンスを探す（情報収集）」の最初の2つのステップについて事例を用いて、小グループで学習するものである。

この演習は学生がエビデンスを探す一連の過程に取り組むことによって、臨床状況から疑問を明確にし、科学的根拠としての研究成果を系統的に検索する能力の育成を意図して構成されている。すなわち、学生が臨床状況から問題を明確にし、エビデンスレベルを考慮しながら、効率的かつ系統的にエビデ

ンスを探す過程を理解することを授業終了時の目標としている。

演習は各々コンピュータ48台が整備された教室（LL教室）2つを使って行われ、最初に医学・看護のデータベースおよびエビデンスを探すときに有用な電子情報源の活用方法について、図書館情報学を修めた看護教員が講義を行う。紹介するデータベースは医学中央雑誌（以下、医中誌と略す）データベース，JMEDPlus，PubMed，CINAHL，Cochrane Libraryである。これらのデータベースや授業で紹介する他の電子情報源はいずれも学内からアクセス可能であり、授業の中では今後の学習においても活用することができることを強調している。

また、効率的に有用な情報を検索するための方法として、キーワードの選び方やシソーラスの使い方、検索結果の適切な絞り込みの方法、検索式の立て方、研究デザインや論文の種類による検索の方法などについて講義を行い、合わせて演習で用いる医中誌データベースの使い方、演習の進め方について、コンピュータを操作し、その画面をディスプレイに表示しながら説明する。学生は数人が一組になり、教員の操作経過に沿って、自分たちでもコンピュータを操作して文献へのアクセスのプロセスを踏む。これは、実際に体験することによって、より理解が進むことを期待して行っている。

3. 「エビデンスをさがす」演習のプロセス

学生は6名1グループとなり、臨床場面から問題を抽出して何が問題なのかを明確にし、検索可能な文章表現にする、問題の定式化を行う。臨床場面は、教員が準備した「事例課題」と、自分たちが実習の場面で疑問に思った「自由課題」の2つを用いて、問題の定式化からエビデンスとなる研究論文を探す。

1) 教員が準備した「事例課題」を用いた演習

(1)以下に示すような事例課題について、グループで話し合っ、問題を定式化する。

<例>東まち子さんの事例

東まち子さんは76歳の女性で、1ヶ月前に脳出血を起して救急車で運ばれ、内科病棟に入院しました。（中略）ある日、娘さんから「母は皮膚が弱いので今の病院の普

通のマットレスでは床ずれにならないか心配です。床ずれにならないマットレスはないでしょうか。」と聞かれました。看護師長から「あなたたちは今、大学でEBNを勉強しているのでしょうか。東さんにとって、よいと思われるマットレスがあるかどうか探してみてください。」と頼まれました。

問題の定式化とは、以下の4要素を明らかにし、1つの文章にまとめることによって臨床疑問を明確化することである。

P : Patient (どんな患者に)

I : Intervention (どのような介入をすると)

C : Comparison (何と比較して)

O : Outcome (どうなるのか)

授業ではPICOを明確にするとともに、文献を探す時のキーワードを抽出する。

(2)キーワードを抽出した後、学生はグループの中で2~3名が1組になって、医中誌データベースを使い、(1)で抽出したキーワードを組み合わせ、文献検索を実施する。

(3)検索した文献のデータを吟味して、課題の臨床疑問を解決することに有用と思われる文献を選択する。

(4)小グループそれぞれで選択した文献のデータを持ち寄り、グループで話し合っ、優先順位の高い文献5件を選び、その文献を選択した理由を各々について記述する。

2) 学生が実習で疑問に思ったことから作成した「自由課題」を用いた演習

学生がこれまでの実習で疑問に思った現象についてグループで話し合い、演習課題とする臨床疑問を決定する。前述の「事例課題」と同様の手順で問題を定式化し、キーワードを決めて文献検索を行い、自分たちの臨床疑問を解決することに有用と思われる文献のうち、優先順位の高い5件を選び、その文献を選択した理由を記述する。

これらの「事例課題」「自由課題」について、文献検索のプロセスと結果をまとめた資料を各グループで作成し、提出する。

3) 各グループの成果の発表と改善点の共有

1) 2) の成果の発表はクラス全体で行う。グループの代表者が、定式化した問題、検索のプロ

セス、有用と判断した5文献およびその文献を選んだ理由、演習プロセス全体を通しての課題と反省について発表する。2名の担当教員と図書館員があらかじめ提出された資料を読んで成果発表に臨み、講評を行って、より適切な検索方法などをアドバイスしている。

この発表会は、具体的な検索履歴及び選択した文献の妥当性を学生、担当教職員全体で検証する機会となり、発表する学生グループだけでなく参加している学生にとっても貴重な学習の場となっている。

学生は、同じ場面を扱ってもグループによって結果が異なることに気づき、他のグループのキーワードや検索方法およびその成果を参考にするとともに、この時に教員および図書館員から得たアドバイスをもとに再度文献検索を行って、課題レポートを提出する。これについても教員と図書館員が多角的な面から適切なコメントを付与し、フィードバックを行う。

4. 「エビデンスをさがす」演習における図書館員の役割

演習に際しては、通常の契約アクセス数では不十分のため、附属図書館から医学中央雑誌刊行会に演習授業時には50、授業時間外の学習時も30程度のアクセス数の増設を依頼し、授業と資料作成時に学生が常時アクセスできるよう環境整備を行っている。必要なときに、常時アクセスできる環境を整備しておくことは、学習意欲を維持する上で重要である。

また、LL教室での検索の時間には、図書館員が教員と共に基本的なデータベース検索上の疑問点、適切なキーワード、絞り込み条件の選定に対するアドバイスを適宜おこない、授業時間外の資料作成時でも質問があれば、図書館員が図書館内の情報自習室のコンピュータを利用して適切なアドバイスを随時行える体制を整えている。

各グループの成果の発表の場面では、キーワードをより臨床問題に沿ったものに変更することや、考えられる同義語の例示、検索結果を確認して、次の検索の範囲の拡大や縮小といったアドバイスを教員とともにしている。

『エビデンスをさがす』演習での学生の学び』の分析方法

調査対象は2006年度のEBN科目受講者2年生78名・全13グループの課題レポートである。以下の5つの視点から分析を行った。

- 1) グループで決定した臨床疑問 (PICOの設定)
- 2) 選択したキーワード
- 3) 有用と考えられた論文種類と研究デザイン
- 4) 論文選択の理由
- 5) プロセス全体の評価

キーワードや論文の種類および研究デザインについては件数と割合を算定した。論文選択の理由、プロセス全体の評価については意味を文脈単位で読み取り、コード化し、類似の意味内容でカテゴリーに分類した。また、複数の研究者により妥当性の検証を行った。

倫理的配慮としては、授業の終了時に科目担当者が口頭で対象となる学生に研究の趣旨、参加は自由意思であること、参加の有無は成績に関係しないこと、および個人名が特定されないことを説明し、研究としてまとめることへの同意の有無を書面をもって回答を得た。同意が得られなかった、個人に関するデータは研究データに用いなかった。また、課題レポートは科目担当者が施錠できる保管庫にて保管し、研究終了後に破棄する。

「演習での学生の学び」の分析結果

1. 学生たちの臨床疑問

学生が実習での経験を振り返って自分たちで考えた臨床疑問は15件挙げられた。以下に例を示す。

- ・眠りが浅い人に対して足浴を実施すると、しないのに比べて睡眠導入効果は上がるか。
- ・ICUに看護師が入室する時、予防衣を着用している場合と、着用しない場合とでは院内感染の発生率は低くなるか。
- ・経口摂取をしない患者に対して口腔ケアをすると、しない場合に比べて感染症の発生率は高くなるか。
- ・浮腫のある患者に冷めた湯で足浴すると、温度を保って足浴する場合に比べて効果に差がある

か。

- ・経管栄養を受けている患者に対して、体温程度に温めた栄養剤を注入すると、温めないで注入した時に比べて、下痢を起こす確率は低くなるか。
- ・看護業務において電子カルテを使用した場合、紙カルテを使用した場合に比べ、医療事故の発生が減少するか。

学生たちはこれらの疑問について、問題の定式化を行い、キーワードを選択した。

2. エビデンスを探すためのキーワードの選択

1つの臨床疑問に対して、2～9 (平均4.9) 個のキーワードを使用して検索を行っていた。15件の臨床疑問の検索に用いられたキーワードは合計73個であった。これらについて、データベースに備えられているシソーラス (同義語辞書) のシソーラス語 (統制語) とシソーラス語ではないもの (非シソーラス語) に分けると、全73個の内、シソーラス語が43個 (59%)、非シソーラス語が30個 (41%) であり、シソーラス語と非シソーラス語を組み合わせで検索が行われていた。

3. エビデンスを探すために選んだ論文種類と研究デザイン

学生は臨床疑問の解決に有用と思われる文献5件を選択するように指示されているが、文献を5件選ぶことができなかった臨床疑問もあり、1課題あたり1～5件の文献が選ばれていた。選ばれた全64件の文献中、医中誌データベースによって原著とされている文献が50件 (78%) を占め、総説が3件 (6%) 解説と会議録は合わせて12件 (19%) であった。原著50件について、抄録などの書誌データから研究デザインを推定したところ、ランダム化比較試験 (Randomized Controlled Trial : RCT) が1件 (2%)、非ランダム化比較試験が7件 (14%)、準実験的研究が11件 (22%)、非実験的研究が25件 (50%)、文献研究などの臨床研究以外の研究が5件 (10%)、不明が1件 (2%) であった。AHCPR (Agency for Health Care Policy and Research : 米国保健政策研究局) によるエビデンスの分類 (福井, 2000) に照らし、この結果をエビデンスレベルで分

けると、最も高いⅠaとされる、「複数のRCTのメタアナリシスによる」ものは無かったが、次のⅠbに分類される「少なくとも1つのRCTによる」ものが1件、Ⅱレベルに相当すると考えられる非ランダム化比較試験と準実験的研究によるものが18件で、50件の原著のうち、合計19件(38%)であった。

4. 文献選択の理由

全50件(複数回答)中、「介入の効果が示されている」、「対象の類似性」などの「論文の内容」を選択理由としたものが27(54%)と半数を占めたが、「論文種類」8(16%)、「発行年」6(12%)など、エビデンスを検討するうえで重要な要素も検討されていることがわかった。その他、論文のページ数や抄録の有無などが選択理由としてあげられた。

5. 学生による演習プロセスの評価(表1参照)

学生による演習プロセスの評価では、「エビデンスをうまく探せた理由」として「明確にPICOを立てたこと」「適切なキーワードの選択」があがっていた。また、「エビデンスをうまく探せなかった理由」として「あいまいなPICOの設定」があげられていた。

検索範囲の変更や絞り込みといった検索の技術に関しては、「検索範囲の適切な変更」「論文種類・年代など書誌データの確認」が「エビデンスをうまく探せた理由」として、また「演習からの学び」として「適切な絞り込みの大切さ」があげられた。

また、この演習を通して、看護研究についての洞察を深めることにもつながり、「研究における倫理的側面への気づき」があった。

一方、「研究数の少なさの推測」「研究数の少なさの理由の推測」からは、自分たちの検索で論文があまり見つからないと、その分野の研究は少ないと短絡的に捉える傾向も見られた。

考察

1. 取り組んだ臨床疑問と実習での経験について

学生が取り組んだ課題は足浴、口腔ケアなどの基礎看護にかかわるテーマが多く見られた。これは、2年次前期までの学習の中から臨床疑問を考え出し

たためである。また、経管栄養剤の温度や電子カルテの利用など、学内で学んだことや演習の環境と、実習で見た臨床のケアや環境に違いがあり、学生の臨床疑問となっていることが推察された。

どのグループのテーマも臨床の中から選ばれており、臨床疑問に合致した論文を探す技術を磨く、という演習の意図に沿ったテーマ選択が行われていると言える。

また、学生は教員や図書館員からのフィードバックや他のグループの成果を共有することによって、キーワードの選択によって検索結果が大きく異なることを学習する。このプロセスを経て、適切なキーワードを用いて問題を定式化する必要性を確認し、自分たちが立てたPICOがあいまいであったことに気づく。この気づきは演習における大きな学びであり、「あいまいなPICOの設定」という学生の評価につながったと考えられる。

2. 選択した論文種類と研究デザインに見るエビデンスの理解

自分たちの臨床疑問を解決することに有用であると学生が考えて選択した文献の論文種類を見ると、原著論文が78%を占め、解説や会議録は少なかった。

医中誌データベース全体の論文種類の内訳をみると、2003年では原著が16%、会議録が60%、解説が22%、総説が1%、その他が1%であり(医学中央雑誌刊行会, 2004)、学生が選択した論文種類の内訳とは大きく異なっている。このことから、学生が意図的に原著を選んでいたと言え、講義で「エビデンス」としての研究成果の位置づけや、原著論文と会議録の違いを教授したことが学生の文献選択に活かされていることが示唆される。

看護研究においては、「影響因子が多すぎて、アウトカムの評価で高いエビデンスレベルの臨床結果を出すのが難しい」(阿部, 2001)ことや、「看護が取り扱う現象は、まだ明らかにされていないことも多いため、記述研究や相関研究が比較的多い」(小山, 2001b)ことが指摘されており、学生が抱いた臨床疑問それぞれに応じて、エビデンスレベルが高いとされているRCTの研究結果を求めることは難しい。こうした状況の中で、論文種類に着目して原著を選んでいたり、選択した原著の中にエビデ

表1 演習プロセス全体を振り返っての学生の考察 (n=58 複数回答)

カテゴリー	件数	サブカテゴリー	件数
エビデンスをうまく探せた理由	19	明確にPICOを立てたこと	4
		適切なキーワードの選択	3
		シソーラスの活用	3
		論文種類・年代など書誌データの確認	3
		検索範囲の適切な変更	3
		その他(同書のアドバイス、抄録の内容の検討、文献を判断する視点の転換)	3
エビデンスをうまく探せなかった理由	5	あいまいなPICOの設定	3
		適切な絞込みができなかったこと	1
		適切なキーワードを探せなかったこと	1
今後の課題	17	適切なキーワードの選択	4
		シソーラスの活用	4
		検索範囲の適切な変更	3
		適切なPICOの設定	2
		その他(常に疑問をもち、考える姿勢、エビデンスレベル以外で考慮すべきこと、海外文献を探すことの必要性、書誌データの確認)	4
看護研究についての推測	8	研究における倫理的側面の気づき	3
		研究数の少なさの推測	2
		研究数の少なさの理由の推測	2
		今後の研究の必要性	1
演習からの学び	6	適切な絞込みの大切さ	2
		専門知識の大切さ	2
		明確にPICOを立てることの大切さ	1
		優先順位決定の難しさ	1
その他	3	選択した文献の信頼性の検討	1
		規定数の文献を選べなかった	1
		原著が少なく、会議録を選んだ	1

ンスレベルがⅠ、Ⅱレベルにあると抄録などから考えられる論文が50件中19件(38%)あること、また、臨床疑問解決のために有用な文献を選んだ理由として、「介入の効果が示されている」ことや、「発行年」をあげていることは、講義で伝えた、エビデンスの高さを評価する要素を学生なりに考慮して、優先順位を決めたと推察される。

このようにエビデンスの高さを考慮した文献選択が行えたことは、学生がEBNの重要な点の1つを理解していることを示している。この演習での、文献を選択するにあたっての優先順位の決め方や、抄録からみた論文の内容の検討が、EBN実践の次のステップである「得られた情報の批判的吟味」につながっていくと考えられる。

但し、この演習では抄録などの書誌データで研究デザインを推定しているが、AHCPRの示すⅡレベルの研究とは、研究デザインの指定のみではなく、

よくデザインされた研究であることが条件となっているため、厳密に個々の研究についてエビデンスレベルを特定することになれば、実際の論文にあたって研究方法などの吟味が必要である。

3. EBNのプロセスに取り組むことによる学生の学び

学生による演習プロセスの評価で、「エビデンスをうまく探せた理由」として「明確にPICOを立てたこと」「適切なキーワードの選択」「シソーラスの活用」などがあげられていた。これは問題の明確化やキーワードの抽出など、最初の段階で臨床疑問を明確にし、適切なキーワードを選択するという、エビデンスを探す上で重要な点が理解されていることを示している。

また、「エビデンスをうまく探せた理由」として「検索範囲の適切な変更」「適切な絞り込みの大切さ」

や、「書誌データの確認」をあげていることは、より適切な検索を行うためには、機械的に文献検索結果の絞り込みを行っていくのではなく、一回ごとの検索結果を見直して、年代や論文種類、新たなキーワードの組み合わせを行うことで検索範囲を拡大したり、狭めたりする必要があるということを演習を通して学生自身が気づいたことを示唆している。

さらに、学生は「適切なキーワードの選択」や「シソーラスの活用」などのEBNを実践していく上での自分たちの「今後の課題」を明らかにすることができたと述べていた。キーワードの選択については、この演習が行われる2年前期には疾患の治療や専門看護分野の学習が進んでいないこともあって、適切な専門用語をキーワードとして選択することを難しく感じられることが考えられる。また、シソーラスについては、この演習で初めて利用する学生が多く、不慣れであることが課題としてあげられる一因と予測される。

しかし、学生が選んだキーワードをみると、シソーラス語と非シソーラス語を組み合わせで用いられていることがわかった。シソーラスとは、統制語とその同義語を関連付け、体系化したものである。シソーラス語を用いた検索では、その言葉の同義語まで検索範囲とすることができるため、広く検索を行うことができる半面、同義語として関連付けられなかった言葉については検索漏れを起こしてしまうという欠点があり、シソーラス語と非シソーラス語を組み合わせで検索することは検索漏れを少なくするために有用な検索方法である。医中誌データベースには、検索者が思いついたキーワードを入力すると、自動的にその言葉と同義の統制語も加えて検索式を立てる、という「統制語への案内」機能がある。これによって、シソーラス語と非シソーラス語両方が検索に使われるという結果が導かれたと考えられるが、学生自身が演習時のミニレクチャーを想起して、網羅的な検索を行うために意図的にシソーラス語の利用や同義語の検討に取組んだとも考えられる。また、エビデンスを探すことがこの授業科目の主要なテーマであるが、学術用語の正確な理解と表現、個々人の専門知識の充実等が正しい検索とエビデンスの高い文献に到達する前提であるという認識を学生が持つ機会にもなっていると考えられる。

また、演習のプロセスや、結果として選ばれた文献の抄録の検討から、「看護研究の倫理的側面」や「今後の研究の必要性」など、看護研究のあり方について考えられる学生もいた。例えば、「浮腫のある患者に冷めた湯で足浴する場合、温度を保って足浴する場合に比べて効果に差があるか」という臨床疑問をもってエビデンスを探したグループは、あえて冷めた湯で足浴をするという、患者に明らかな不快をもたらし、その効果が考えにくいことが容易に推測されるような研究は行われにくく、そのため、検索しても臨床疑問に即したエビデンスは見つからない、という経験を得、看護研究について考える機会となっていた。このことは「エビデンスをさがす」演習が、看護研究について考えるという学習の転移へのきっかけにもなっているといえる。

以上のことから、演習の目標である「臨床状況から問題を明確にし、エビデンスレベルを考慮しながら、効率的かつ系統的にエビデンスを探す過程を理解する」ことについては、演習の一連のプロセスに取り組むことによって概ね達成できていただけてだけでなく、演習目標に含まれていなかった、研究の倫理的側面や看護研究の理解など、予想以上の成果が得られたことが明らかになった。2年前期という時期にEBNについて教授・学習することについては、専門科目が未履修のために専門的視点から深く学習するには限界があるが、物事の根拠を系統的に探すという、大学生としての基本的能力をこの時期に習得することは、それ以降の専門領域での学習に大きく影響すると考える。特に実習においては臨床の場面で生じた学生の疑問をそのままにすることなく、エビデンスを探し、看護計画に活かしていくことが期待される。

4. 学習を促進させるための授業の改善

以上のように「エビデンスをさがす」演習における学生の学びを分析した結果明らかになった、学生が課題と感じている学習については、次のような改善に向けた取り組みを現在行っている。

問題の定式化については、学生の意図を尋ねて「介入(I)」をより具体的に変更したり、「結果(O)」を絞り込んだりするようアドバイスをして明確なPICOを立てられるように援助したが、学生が臨床

疑問ではないテーマを選択する場合があります、臨床疑問の明確化に予想以上の時間を要するグループもあった。授業時間内に文献検索を終えることへの配慮から、次の年度の演習では、教員が複数の紙上事例を用意し、その中から選んで臨床疑問を立てるという方法に変更した。

キーワード選択に関する困難に対しては、医学や看護学の専門辞書を用意したり、シソーラスを使って学生が考えたキーワードのシソーラス語や、関連する同義語を探すように勧めたり、学生の意図を聞いて一緒にキーワードを考えて対処した。

シソーラスの利用を含めた、データベース検索の不慣れについては、データベースに備わった、看護分野の文献のみを検索する機能を紹介したり、学生が使っていなかった絞り込み項目を提案したりして、新しい検索式を試してみるように勧め、試行錯誤を通して徐々に効率的な検索の方法に慣れていくように支援している。

また、自分たちの検索で論文があまり見つからないと、その分野の研究は少ないと短絡的に捉える傾向も見られることもあり、このような場合は新しいキーワードの提案や臨床疑問の見直しを行って、再検索を促した。授業を通して、看護分野で介入研究を行うことの難しさに触れ、貴重なエビデンスを有効に活用するためにEBNの手法を実践に取り入れることの重要性を伝えている。

結論

看護学士課程2年次に開講しているEBN科目の「エビデンスをさがす」演習についての学びの分析を行った結果、演習のプロセスにおいて、学生は教

授した内容を取り入れ、エビデンスの高い文献を求め、検討するための取り組みを行っていることが明らかになった。エビデンスを探す各段階での支援や、検索結果の捉え方の指導などの課題はあるが、グループワークにより文献検索のプロセスに実際に取り組むことはEBNの理解やスキルを獲得することを助けていると評価でき、2年次にEBNを教授することの適切性を検討する上での一助となると考えられる。

なお、本稿の一部は2007年国際看護師協会（ICN）学術集会で発表した。

文献リスト

- 阿部俊子，嶋森好子，名郷直樹，日野原重明．（2001）．EBNで看護はどう変わるか．*EB Nursing*, 1(1), pp.5-15.
- 福井次矢．（2000）．Editorial．*EBMジャーナル*, 1(1), pp.5-7.
- 医学中央雑誌刊行会．（2004）[cited 2007 Sep 19]. 医中誌Web（Ver.3）検索ガイド（改定2版）．医学中央雑誌刊行会：URL: http://www.jamas.or.jp/pdf/wguide_ebook.pdf
- 看護学教育の在り方に関する検討会．（2002）．大学における看護実践能力の育成の充実に向けて．文部科学省．
- 小山真理子．（2001a）．Evidence-Based Nursing（EBN）と看護実践．*EB Nursing*, 1(1), pp.18-22.
- 小山真理子．（2001b）看護におけるEBN．日野原重明監修，基本からわかるEBN（pp.85-103）．東京：医学書院